

九州大学蔵『万水一露』零本をめぐって

宮崎, 裕子
九州大学大学院博士後期課程

<https://doi.org/10.15017/10346>

出版情報 : 文献探究. 38, pp.60-69, 2000-03-31. 文献探究の会
バージョン :
権利関係 :

九州大学蔵『万水一露』零本をめぐって

宮崎 裕子

一

本書は、縦一八センチ・横二五センチ、上下二冊の写本。九州大学国語学国文学研究室蔵。図書番号「国文17F-70」。『源氏小鏡』の名称で登録されているが、上下巻ともに題箋が剥落しており、本来の書名は不詳。上巻表紙左肩の題箋部分に「上」の文字が僅かに残る。上巻は、巻頭・巻末に遊紙一丁、下巻は巻頭に遊紙一丁、巻末に遊紙三丁。

上巻が絵合・松風巻、下巻が薄雲・槿巻の注釈。その内容は、『源氏物語』の梗概を旨とする『源氏小鏡』とは異なり、『源氏物語』本文を項目ごとに注釈する形をとっており、『万水一露』に非常に似通っている。

『万水一露』は、連歌師能登永閑の手になる十六世紀成立の『源氏物語』注釈書の一つで、『河海抄』『花鳥余情』『弄花抄』『細流抄』『和秘抄』といった従来の諸注釈書の所説を多く引用する注釈集成に類するものである。著者永閑の自説には「閑」、その師で

ある宗碩の説には「碩」の肩付を施して収録している。しかし、本書には「閑」注に肩付が一切見出せず、「碩」注は肩付のみならず注記そのものがほとんど存在しない。また、一般に広く流布している『万水一露』とは、項目数・引用注釈書・注記内容などにかんがりの違いがある。

二

例えば、絵合巻の注釈に相当する部分をいくつか比較してみると、次のようになる。

*上段・本書（以下「九大本」）、下段・流布本。

*流布本『万水一露』の引用は、伊井春樹編『萬水一露』（桜楓社刊）に依った。その底本は寛文三年刊行の版本であり、本文に傍線を施して、校合本である河野記念文化館蔵本（写本）の該当箇所を本文を示している。また、それぞれの項目番号については、九大本は私に付したものであり、流布本は

前掲書に依る。

1 卷の名乃事 此卷は詞をもて名とする也源氏三十歳の事此卷に見えたり廿九歳の事は物語にかけたり然は濤標卷と此卷との間に一年籠にや絵合の例は後拾遺集の詞に正子内親王絵合の事見えたり扇合双紙合根合などみな哥をもて詮用とせり此絵合は三月の比也齋宮女御と弘徽殿女御と御絵合之興故に卷の名とする也

卷名 以詞号せり兩度の絵合あり内々又外様と見えたり凡天徳の哥合に模してかけりとみえたり冷泉院を村上に比したる也源氏卅歳の三月也物語の上には廿九歳の事慥に見えず前齋宮の御参りの事廿九歳の冬あるへきかと思えたり其故は故宮す所の周忌霜月辺成へし然は其末に入内あるへし正二月の間に入内あらは此絵合やかては有ましき歟 此卷は詞をもて名とする也源氏卅歳の事此卷に見えたり廿九歳の事は物語にかけたり然者濤標卷と此卷との間に一年籠にや絵合の例は後拾遺集の詞に正子内親王絵合の事見えたり扇合草子合根合などみな哥をもて詮用とせり此絵合は三月の比也齋宮女御と弘徽殿女御と御絵合之興故に卷の名とする也

2 前齋宮の御まいりの事 後に秋好の中宮と申也濤標卷に

伊勢より帰京し給今年廿二歳御門は十三歳に成給へし冷泉院の女御に御参成へし齋宮をおりみ給故に前とはいへり

3 中宮御心にいれて 薄雲女院

の事也もと中宮にてまします故に其名を申ならはしてかける也齋宮入内をもよほし給と也

1 前齋宮の御まいりの事 秋好也冷泉院の女御に参給也

齋宮の人帰京ありて入内の例抄に見えたり 濤標卷に伊勢より帰京し給ふ今年廿二歳帝は十三歳に成給なるへし 齋宮をおりみ給故に前とは云り

2 中宮の御心にいれてもよほし

聞え給ふこまかなる御とふらひまで 薄雲出家の後なれとも只今別に中宮なしさてまされなきゆへにかくかける也薄雲の御心此入内の事可然由の給事濤標卷に見えたり 薄雲一勘もと中宮にてましける故にかくは書る也 其名を申ならはして中宮と書る也齋宮入内を催給と也

4 こまかなる御とふらひまで

源氏の御心也取たてゝの御

3 とりたてたる御うしろのみもなしとおほしやれと 源の心

うしろみに成給はんとはお
ほさねとゝ也

6 二条院にわたし奉らん事をも
弄花二条院より入内あらせ
はやと思給へとも朱雀院を
はゝかり給也云々

11 御くしのはこうちみたりのは
こかうこのはことも うちみ
たりのはこのうへにては髪
をける時打みたし侍けれ
は箱の名になつて侍る也香
壺箱種々香を納むる壺也

閑源氏の心也とりたてての
御うしろみに成給はんとは
おほさねとゝ也

5 二条院にわたし奉らん事をも
此たひはおほしとまりてたゝし
らすかほにもてなし給へれとお
ほかたのことゝもはとりもちて
おやめき聞え給ふ 弄二条院よ
り入内あらせはやと思給へ
とも朱雀院をはゝかり給也
二条院より入内あるへき
かなと思給たれと院への聞
えをおほして空しらすし給
也

10 御くしのはこうちみたりのは
こかうこのはこともよのつね
ならず ちうちみたりのはこ
のうへにては髪をける時
うちみたし侍れば箱の名に
なつて侍るへし 弄うちみ
たりの箱とは髪具なれば
うちみたりといふ也かうこ

89 心ふかゝらて今見ん人たに

源氏左遷の事をしらて只今
見ん人成とも心あらん人は
涙おしむましと也それを今
見ん人といへり

一見して明らかなように、九大本は流布本に較べて他注釈書から
の引用が少なく、引用した際にも肩付を施さない場合がある。更に、
前述したように、「閑」注には肩付がない。

『万水一露』の写本は、版本よりも『源氏物語』本文の短いもの
が多く、その点では、本書も同様である。しかし、九大本4に掲げ
られた『源氏物語』本文は、次のように絵合巻の同じ文脈からの引
用ではあるものの、他の写本とも異なる箇所を引いている。

前齋宮の御まいりの事、中宮の御心に入れてもよをしきこえ
給ふ、こまかなる御とぶらひまで、とりたてたる御後見もなし
とおぼしやれど、大殿は、院に聞こしめさむ事を憚り給て、二

の箱とは渴丁也 弄かうこ
のこの字清濁両様也 願か
うこのこもし可濁一注 閑
香壺箱種々香を納むる壺な
り

100 しらて今見ん人たにすこし物

思ひしらん人は涙おしむまし
く哀なり 弄一向しらする人
成とも哀なるへし 閑源氏
左遷の事をしらて只今見ん
人なりとも心あらん人は涙
惜ましと也それを今見んと
云り

条の院に渡したてまつらけことをも、この度はおぼしとまりて、たゞ知らず顔にもてなし給へれど、大方の事どもはとりもちて、親めききこえ給ふ。(新大系②総合168頁)

また、九大本89(流布本100に相当する)に掲げられた本文は、写本・版本と同じく青表紙本系統ではあるが、池田本・三条西家本のみに見られるものである。

三

そこで、『万水一露』の諸伝本中でも特異な本文を持ち、初稿本と目される国立国会図書館本『万水一露』(以下「国会本」と九大本とを照合したところ、両者は同一系統の伝本であることが判明した。

九大本が有する総合・松風・薄雲・権各巻を、国会本の該当巻と比較すると、以下の共通点が見出せる。

○流布本『万水一露』同様、『河海抄』『花鳥余情』『弄花抄』『和秘抄』は引用に際し、肩付を付されているが、『細流抄』からの引用と思われる箇所には肩付が付されておらず、また、『細流抄』からの引用自体、その大部分が存在しない。

○流布本『万水一露』では、著者能登永閑の自説に「閑」、その師である宗碩の説に「碩」の肩付が付されているが、九大本・国会本には、それらの肩付がなく、更に「碩」注に相当する内容はほとんど見出せない。

○掲げられた項目数が

総合巻：九大本 232

国会本 (九大本の207項を欠く)

松風巻：九大本 257

国会本

薄雲巻：九大本 362

国会本 (九大本の124・292項を欠く)

権巻：九大本 268

国会本 (九大本の232項を欠く)

と、ほぼ一致しており、またその注記内容も全て一致する。以下、九大本と国会本の内容を比較してみる。

1校異

九大本と国会本との間で目立つ異同は次の通り。

*項目番号は九大本のもの。その下に記した漢数字は、桜楓社刊『万水一露』の項目番号。

*太字は『源氏物語』本文。

*肩付は半角、割注は小字で示した。

*見せ消ちは「齋」と表記し、「齋」を見せ消ちして「歌」を書き入れていることを示す。

126 (四五)	125 (四三)	108 (三五)		53 (五七)	31 (三五)	22 (三三)	18 (二八)	8 (七)	▽総合巻	項目番号
いひけつと也	正三位 伊物	云々廿二帖有疑	右うつほの物語右也源順作也	花鳥に見えたりうへのも宮のもとありければ惣しての事也絵合は二たひ也始のは梅壺にてと花鳥にあり三月十日比と又後と也	いとおかしとおほしたり	は無用の事を思より給て	別路にそへしをくしをかことにてはるけき中と神やいさめし	御せうそこなとたえにたるを	九大本	国会本
いひけると也	正三位の物語 伊勢物語	廿二帖	右うつほの物語源順作云々	花うへのも宮のもとありければ惣しての事也始のは梅壺にてあり三月十日比と又後と也	いとおほしとおほしたり	は無用の思より給て	別路にそへしをくしをかことにて	御せうそこなとたえわたるを		

51 (五九)	5 (五)	▽松風巻	230 (三六)	224 (五四)	207 (三五)	200 (三八)	190 (三六)	154 (七六)	147 (七)	133 (五四)	131 (五)	128 (四八)
老ぬれは同じことこそいす	見ところありてこまかなりしんてんはふたけ給は		是源氏ノ御心也	妃に立給はぬ事はあらしとたのもしく思ひ給	いとかうまさなきまでつよくほめたる詞也	歌い	仲尼弟子伝トハ孔子ノ名也	しめのうちはむかしにあらぬ心地して神代の事も今そ恋しき	沈の管を透たる袋に入たるをいふにや	伊物	左の勝にしたかふ成へし	雲のうへに思ひのほれる心にはちひろのそこもはるかにそみる
老ぬれは同じことこそい	はふたけ給はす		ナシ	后に立給はぬ事はあらしと思ひ給	該当項目ナシ	謡歌	仲尼弟子伝仲尼トハ孔子ノ名也	しめのうちは昔にあらぬ心地して	たる袋に入たるをいふにや	伊勢物語	左の方にしたかふ成へし	雲のうへに思ひのほれる心にはちひろのそこも

223 (二六九)	204 (四六)	170 (三〇六)	168 (三〇四)	161 (九六)	117 (四〇)	113 (三六)	109 (三二)
花鳥此弁源氏の君の鴻臚館にて高麗人にあひ給し時の人かと先達称するよし河海にしろされたる大なる僻事也源氏の高麗人に相せられしは七歳の時也今年はすてに卅歳に成侍り今まで納言などにも	とす	ヒメ君ヲ源氏思	と 御迎ともにひかれて出給	君ノ御心	てはにこるへし	宇豆麻佐 <small>日本紀</small> 桂院とは桂宮との心にや	さへつることゝは琴をか ねたりさへつるとは琴引 さまをいへり
ナシ	鳥獸草木の名をしるを用とす	ナシ	該当項目ナシ	ナシ	ナシ	ナシ	はれけれ君は千世ませ君 はちよませ此歌の心にて かけるにや

95 (九)	61 (六〇) ▽薄雲卷	254 (三五)	247 (二九七)	224 (二七〇)
云々 花鳥に別に注とあり一勘 云今世無存知人頗秘事也	弄花云和秘抄に見えたり 尋通はんと也右の本歌の 類也	わひ給へはいかゝはせん と笑止なる心成へしわひ 給へはいかゝはせんと笑 止なる心成へし	引歌朝編御歌子 ナシ	昇進せずして右大弁にて 有へき事いかゝと覚侍り 又一本には左大弁とあり 云々
云々 弄に世無存知人頗秘事也	ナシ	ナシ	ナシ	又説前の詞に桐壺の御事 を故院の御時にもむつま しうとあれは桐壺の御事 よめるにや

341 (三八八)	297 (三二五)	292 (三〇九)	291 (三〇八)	281 (二九四)	270 (二八〇)	268 (二七八)	124 (二二〇)	116 (二一三)
源氏の御心に秋好に心をかけ給と薄雲に密通し給しことを思くらへ給に薄	小町か姉	への御礼儀也 すゝひきかくして 女御	薄雲の御ためには世上を ははかる心也	いつれに先かさねてのこ とゝしたの心は隠遁なる へ	為醍醐天皇御子親王	立さる也 毒といへる者へゆつりて	いたうなれて 中將のた ゝもなきさまをいへり	弄花一勘家司ともともあ り
源氏の御心に秋好くらへ 給に薄雲の事は猶罪深き かたはおほうまさると也	ナシ	該当項目ナシ	薄雲の御ためには中宮の は世上をはゝかる心也	いつれに先かさねてのこ とゝいふ事也したの心は 隠遁なるへし	為親王	也 初は呂不韋密通之あらは れん事を思ひて桜毒とい へる者にゆつりて立さる	該当項目ナシ	ナシ

114 (一一三)	112 (一一七)	73 (七八)	70 (七四)	65 (六八)	63 (五六)	36 (三八)	▽ 權卷
源氏をさしのけ給もとかに 此つみもなしやとは紫上之 へき比哉つみもなしや	ナシ	そのおり／＼おかしくも 御懇の御ことゝもをおも ひ出て權へ申と也	世にしらぬやつれをいま そとたにきこえさすへく やはもてなし給ける い まなくさめ給はぬそとの 心也	ナシ	あな心うその世のつみは しなとの風にたくへてき との給ふ 源氏の詞也東 南の間より吹風をいふと いへり	女五宮	雲の事は猶罪ふかきかた はおほうまさると也
源氏をさしのけ給も咎に つみもなしやとは紫上之 き比かな	暇申事也	そのおり／＼おかしくも あはれにも 源氏の此宮 へ色ゝ御懇の御ことゝも をおもひ出て權へ申と也	世にしらぬやつれをいま そとたにきこえさすへく やはもてな そとの心也	此詞は宣旨か詞	あな心うその世のつみは しなとの風に いふとい へり	ナシ	

208 (三五)	てなきと也 紫上のさまをいへり	てなきと也 紫上をいへり
219 (三六)	弄花おさなき躰也けの字 濁一勘童気てといふ心也 わらはへとものおさなき 心に通はしたる躰也云々	ナシ
232 (五〇)	すこしわつらわしきけそ ひて 紫上は物えんしか すゝみたる也爰は源氏 のたはふれにの給成へし	該当項目ナシ
248 (七一)	花鳥かきつめてはかきあ つめてなりむかし恋しき は薄雲女院の御事上にい へること也雪もよは雪の 夜なりあめもよに雨の夜 也一説雪もよは雪もよほ しといふ詞也 新古今草 も木もふりまかへたる雪 もよに春まつ梅の花の香 そする通具歌也此歌は催 心にかなへるにやをしの うきねは鴛鴦の契に対し て紫の御方と物かたりし 給夜のこと也云々	花雪もよに雪の夜なりあ めもよに雨の夜也一説雪 もよは雪もよほしといふ 詞也 新古今に通具の歌 草も木もふりまかへたる 雪もよに春待梅の花のか そする此歌は催心に叶へ るにや花鳥のをしの浮ね は鴛鴦の契に対して紫の 御かたに物かたりし給夜 の事也云々

267 (三九〇)	弄花よにの二字詞の助に や云々但少歌に心あるや うにきこゆる詞也可思惟 云々又夜の催云々	弄もよ夜催同説
	三瀬川を水にそへたる也 三途川の事也	三途川を水にそへたる也

引用された『源氏物語』の本文に関しては、九大本・国会本間に大きな違いは見出せないが、松風巻5項のみ、九大本が青表紙本系統、国会本が河内本系統を引いており、別系統となっている。
 注釈文に関する異文表記は九大本権巻114項のみで、これは書写當時から記入されていたものと考えられ、九大本書写者がもとにした本にすでに存在していた可能性がある。

2 傍書

▼共通、もしくは類似の傍書

* 右・九大本、左・国会本（以下同）。

▽絵合巻12 (一一)

・ 梅枝巻 有之 チヤワシノ物ノ心也

・ 梅枝巻有之 チヤワシノ物類

▽松風巻21 (三三)

・ 今の清涼寺の東にある 是ハ仙人ノ心ニ云リ云々

・ 今の清涼寺の東にある 是ハ仙人ノ心ニ云リ云々

・ 今の清涼寺の東にある 是ハ仙人ノ心ニ云リ云々

▽松風卷 113 (二三六)

- ・ 桂院とは太秦ウツアサノ寺号也の寺の辺西にあり
 - ・ 桂院とは太秦ウツアサノ寺号也の寺の辺の西にあり
- 寛文三年版本にも同様の傍書が見える。

▽九大本の傍書が国会本では本文となつてゐる箇所（傍線引用者）
▽權卷 65 (六六)

- ・ 今案ありし世のつみはみな
引恋せしのみそきを
しなどの風にかくへてあとかたなく侍れと恋せしのみ
神はうけすかち人を
そきは神もうけ給はぬやらん今もおなし心に侍るよしの給也
つみふかしとて
引歌花鳥恋せしとみたらし川にせしみそき神はうけすも成にける哉
- ・ 今案ありし世のつみはみなしなどの風にかくへて跡かたなく侍れと恋せしのみそきは神もうけ給はぬやらん今も同心に侍るよしのたまふ也

引歌恋せし御祓は神もうけすかも人をわするゝ罪ふかしとて
恋せしとみたらし川にせしみそき神はうけすも成にける哉

▽權卷 184 (一九〇)

- ・ かつさふらふ人／＼
かくと云詞なり
それも源氏に同心の人々なれば心をき給と也
- ・ かつさふらふ人／＼
それも源氏に同心の人々なれば心をき給と也
かつはかくといふ詞也

この二例については、国会本が九大本の傍書を本文として採用したというよりも、九大本書写者が書き落とした本文を傍書の形で加えたものである。九大本には、同様の例が他にも一例あり、薄雲

卷 231・232 項は次のようになってゐる。

- 一心にしたらて過なましかは 天子の御詞也 爰にては無曲との心成へし
- 一かへりてはうしろめたき

この箇所は、国会本では、

心にしたらて過なましかは 天子の御詞也

かへりてはうしろめたき 爰にては無曲との心なるへし
と、『源氏物語』本文と注釈文とが一致してゐる。

国会本の傍書が九大本の本文となつてゐる例は無い。

また、九大本にのみ存する繪合卷 79 項の傍書

屏風の絵に詞を書きそへたるにや
御歌ノ事也 四季ニ合テ書也

は、流布本（八八）の「頌」注

歌などを四季に合てかけるにや

と似通つてゐる。

3 共通誤謬

九大本・国会本の共通誤謬は、次の四箇所（傍線引用者）。

▽松風卷 204 (二四六)

- ・ 雅行ウツアサノにをちあはれて鎌倉に跡を暗くしけりと云々貫ウツアサノ之兩人問答 猶理不盡にや
- ・ 雅行ウツアサノにをちあはれて鎌倉に跡を暗しけりと云々貫ウツアサノ之兩人問答 理不盡にや

↓流布本「親行におちあはれて鎌倉に跡を暗しけりと云々案之 兩人問答猶理不盡にや」

▽松風巻 218 (六六)

・伊勢か中におひたるとよめるもかつらに侍ける時七条中宮のとはせ給ける時の御返事によめる歌也

・花―伊勢か中におひたるとよめるも桂に侍ける時七条中宮のとはせ給ける時の御返事によめる歌也

▽薄雲巻 256 (六六)

・撰政中宮式部卿宮などの事也それは時刻到来との心也

・撰政中宮式部卿宮などの事也それは時刻到来との心也

↓流布本「頃撰政中宮式部卿宮などの事也それは時刻到来との心也」

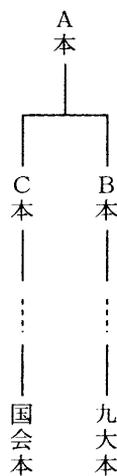
四

九大本と国会本とを比較してみると、九大本の方が注記項目・文章量ともに多い。

しかし、国会本に見えて九大本には見られない文章・語句も、その逆よりは少ないにせよ存在しており、また、九大本「権巻 114 項」に国会本の注釈文とほぼ同じものが異文として記されていることから、両者には直接の書写関係が無いと考えられる。ただし、両者には、共通の誤謬・傍書が存在しており、書写過程を遡れば共通の祖本に辿り着くと思われる。

九大本が有する絵合巻・松風巻・薄雲巻・権巻の四巻のみの比較では、国会本との関係を判断するのは困難ではあるが、前述の理由から、両者が直接に関係しているとは考えにくい。両者に共通の誤

謬・傍書を含んだ祖本（A本）が存在し、そこからそれぞれ



というように派生していったものが、九大本・国会本ではないかと思われる。

付

九大本には松風巻の巻名下に次の一文が小字で記されている。

身ヲカヘテ独カヘレル山里ニ聞シニ似タル松風ソ吹尼公ノ哥大井ノ宿ニテ前ノ詞ニ人ハナレタル方ニ打トケテ琴ヒクニ松風ハシタナクヒ、キアヒタリ尼公物悲シケニテヨリフシ玉ヘルオキアカリテヨミ侍リ

この注記内容は国会本・流布本には見られないが、『岷江入楚』松風巻の巻名に関する注に類似のものが存在する。

斎宮女御集、「身をかへてひとりかへれる山里に聞しににたる松風ぞふく」此詞の前の詞に、「かの御かたみのきんをかきならずをりの、いみじうしのびがたければ、人みなれたるかたにうちとけて、すこしひくに、松風はしたなくひゞきあひたり。あま君、物かなしげにてよりふし給へるを、おきあがりて、歌に身をかへて云々。」（引用は、「国文学注釈叢書」に依る）

（みやざき ゆうこ・九州大学大学院博士後期課程）